

# 偉大な一家の二泊三日ともう少し

上田陽介 上田屋旅館のオーナー。先祖代々やる気が無い。 誠我

上田小春 陽介の妻。長所は明るい事。短所は明るすぎる事。 住吉

上田瑞季 陽介と小春の娘。高校生。 村下

江藤公宣 上田旅館番頭。 鈴木

織田家康 上田旅館板前。実質板長。 深井

史文道 中国からの留学生。手先と日本語が器用。 池田

畑山由佳里 上田旅館従業員。小悪魔。 沼田

ホン・テ・クレネンテープ ピルピン王国・現国王。好奇心の塊。 錦織

テム・フルワ・パトチャイ ホンの付き人。 村尾

上田旅館のフロント。

瑞季が誰かを探すようにキョロキョロと入ってくる。

瑞季  
・・・あれー？

畑山が掃除用具を持ちながら通りかかる。

畑山 あ、瑞季ちゃんお帰りなさい。

瑞季 ただいま。由佳里さん、江藤さんは？

畑山 っ、さつき史君と一緒にフロントに居ただけどなあ。ベル、鳴らしたら？

瑞季 いや、お客さんじゃないし。それはちょっと気が引ける。

畑山 瑞季ちゃん真面目なんだね。

瑞季 あ、うん。裏かな？

畑山 もうチェックインの時間だし、待ってたら、来るんじゃないかな？

瑞季 判った。ありがとう。

畑山が去る。

瑞季、携帯を見ながら怒りを含んだため息。

江藤と史がやってくる。

江藤 だから何でもかんでも燃えるゴミに置いちやダメだから。

史 判りました。あれは燃えない体なんですネ？

江藤 燃えない体っていうか粗大ゴミなんだけどね。

瑞季 江藤さん。

江藤 ああ瑞季ちゃん。

史 おかえりなさい。

瑞季 ただいま。江藤さんちよっといひ？

江藤 え？

瑞季 露骨に嫌そうな顔しないでもらえます？

江藤 してませんよ。

史 してましたよ。嫌そうな顔でしたよ。露骨。

瑞季 ほら。史さんもそう見えたよね？

史 見えました。嫌そうな顔でした。そう見えました。

江藤 そうかなあ。

瑞季 そうだよ。四の五の言わずにいいですか？

江藤 あー、ちよつと待っててもらえます？先に史君に四の五の言いたいんで。

瑞季 判りました。じゃあちよつとだけ待ちます。

江藤 すみませんね。・・・えーっと、

史 タンスは燃えないです。

江藤 あー、そうそう。粗大ごみね、タンス。

史 燃えるんですけどね。木だから。

江藤 そうなんだけどね。

史 なんで判らないんですかね。ゴミの人。

江藤 判つてると思うよ。燃える事は。

史 では何故？

江藤 大きさかなあ。

史 大きさ。

江藤 たぶんねえ。

史 それはどれぐらいの大きさから粗大ゴミですか？

江藤 どれぐらい？・・・膝上？

史 膝上。

江藤 うーん・・・膝上。

史 膝上。ここまでは燃えるゴミ燃えないゴミ。ここから先は粗大ごみ。

江藤 うーん・・・。

瑞季 江藤さん。

江藤 はい。

瑞季 どうでも良くない？

江藤 え？

瑞季 待つてるんだけど。

江藤 ああすみません。取りあえず史君ね、ゴミ捨てる前に、僕に何ゴミか聞いてくれる？

史 判りました。ゴミは江藤さん。

江藤 うん、言い方考えようか。僕がゴミみたいになっちゃうからね。

史 違いますか？

江藤 ・ ・ ・ 違うね。今の「違いますか？」も、大分違うね。

史 判りました。今後ともご指導ご鞭撻をよろしくお願いします。

江藤 はい。よろしくお願いします。じゃあ掃除の続きお願いします。

史 はい。

史が裏へ引っ込む。

瑞季 史さんの日本語すごいな。

江藤 お待たせしました。なんですか？

瑞季 これですよ、これ。見ました？

江藤 また旅館のロコミサイトですか？

瑞季 ウチの旅館の書き込みが増えてて。

江藤 どれです？

ホンとテムが入ってくる。

テム すみません。

江藤 あ、いらっしやいませ。

江藤はフロントへ瑞季は端へ下がる。

江藤 ようこそ上田屋へ。ご予約のお客様ですか？

テム 左様です。

江藤 お名前を御伺いしてもよろしいですか？

ホン 良きに計らえ。

テム ははー。本田です。

江藤 本田様。

ホン 余が、ホンだ。

江藤 、本田様。

テム そうです。

ホン 其方は？

江藤 はい？

ホン 其方の名は、なんと申す？

テム お名前を御伺いしてもいいですか？

江藤 ああ・・・江藤と申します。

ホン エトウー。

江藤 江藤です。

ホン ホンだ。

江藤 はい、本田様。

ホン テムだ。

江藤 テム田様？

テム ・・・・テム田です。

江藤 えー・・・本田様と、テム田様ですね。・・・二名様二泊でご予約の本田様でよろしいでしょうか？

テム よろしいです。

江藤 ではこちらにご記名をお願いします。

テムが宿帳に記名している間に江藤が裏から畑山を呼んでくる。

江藤 はい。ありがとうございます。

畑山 ではご案内致します。こちらへどうぞ。

テム はい。さっ、こちらへ。

ホン うむ。

ホン達が部屋に向かう。

瑞季 変なお客さん。

江藤 で、書き込み、どれです？

瑞季 そう、これ！また評価が下がってるんだけど。

江藤 ああ・・・。

瑞季 これ見て、このコメント。「ロビーで従業員が寝てた。」ってこれパパでしょ？たぶん。

江藤 ああ、社長よく寝てますもんね。

瑞季 起こして？江藤さん。あそこで従業員が寝てたら変でしょ？

江藤 いや、社長はちよっと起こし難くて。

瑞季 いいから。怒らないから。パパに怒られた事無いでしょ？

江藤 無いです。

瑞季 それもまあ問題なんだけど。とにかく！みんなしつかりしてくれないとこの旅館潰れちゃうから。立地に甘えて他がおざなりすぎるんだもん。

江藤 まあお城がこんなに関近で見れる旅館はここだけですからね。

瑞季 大須城が無かったらとくに潰れてるよ。昔はロケーションだけでお客さん来ただろうけど、今は口コミサイトで宿の評判が判っちゃうんだからさ。

江藤 リピーターはあんまりいませんもんね。

瑞季 私が大学進学して一人暮らし始めて、で、帰ってきたら旅館が無いとかリアルにありそう。

江藤 ああー。繁盛してるよりは現実味ありますねえ。

瑞季 江藤さん！

江藤 はい！すみません！

瑞季 それじゃあ困るでしょ？江藤さんも！

江藤 もちろん、はい。

瑞季 頑張ろう！本当に！せめて江藤さんだけでも！

江藤 おお、1人だけ期待が重い。

織田が裏から顔を出す。

織田 江藤さん、社長知らねえか。

江藤 社長ですか？

瑞季 パパがどうしました？

織田 ああ瑞季ちゃんか。・・・いや、何でもねえんだ。気にしねえでくれ。

瑞季 気にしますよ。何ですか？

織田 ・ ・ ・気にしねえでくれ。

瑞季 いや、気になるでしょ？織田さん。何ですか？

織田 瑞季ちゃん。人にはなあ、知らねえ方がいい事もある。だからここは黙って、

瑞季 織田さん、パパに何のようだから教えてください。

織田 ・・・そうは言っても瑞季ちゃん・・・知ったら絶対怒るぜ？

瑞季 それは予想出来るんで。

織田 そうかい・・・実はさっき社長に、おやつに井一杯のあんみつを作る様に頼まれてな。(井一杯のあんみつを出す。)

瑞季 江藤さん、パパは？

江藤 知りません。

瑞季 パパ！

織田 ほら怒った。

瑞季 旅館を私物化するなって言ってるでしょ！パパ！どこ！？

瑞季が陽介を探しに行く。

江藤 瑞季ちゃん、館内で騒がないでくださいーい。

暗転

オープニング。

上田家の部屋。

陽介が寝転がってテレビを見ている。小春は本を読んでいる。

瑞季 パパ！

陽介 お、瑞季。

小春 あ、瑞季おかえりー。

瑞季 ママくださいま。パパ、また織田さんにおやつ作らせたでしょ？

陽介 え？・・・バカな。何故バレ・・・！予知夢、

瑞季 織田さんの仕事の邪魔しない！織田さんはお客さんの食事を作るのが仕事で、パパのおやつを作るのが仕事じゃないんだからね予知夢って何！

陽介 瑞季。そんなに一遍に言われても、パパは理解出来ないぞ。

瑞季 して。理解。旅館を私物化しないで。

陽介 してないよお。私物化？してないよお。

瑞季 ロビーで寝ないでって言ってるでしょ？

陽介 あー・・・あれはね、あそこ日が当たってすごく気持ちいいんだよ。

瑞季 何の言い訳にもなってない。・・・ねえ、パパもちゃんと働こうよ。

陽介 そうだな。前向きに、検討していこう。

瑞季 そういつて全然働かないじゃん！

陽介 いいかい瑞季？上田家はね、代々この大須城を望むこの立地で旅館を続けてきた。それはここだと勝手にお客さんが来るからなんだよ？そこそこの接客をしていけば生きていける、それが上田家が代々受け継いで来た魂、なんだね。

瑞季 全然いい話じゃないよ！先祖代々怠け者なだけじゃん！

陽介 （微笑んで）そうじゃん？

瑞季 そうじゃんじゃないよ！ねえ、ママもパパになんとか言ってみてよ！

小春 え！？・・・愛してるわ。

瑞季 そんな話してないよ！

小春 え？え？ごめん！全っ然聞いてなかったの。もうビックリするぐらい。もうビックリするぐらいの？・・・恋バナ？・・・ねえ恋バナ？

瑞季 このテンションで！恋バナだと思う！？

小春 「娘はやらん！」みたいな！？

瑞季 みたいなじゃないよ！

陽介 瑞季。

瑞季 何？

陽介 万が一な。万が一彼氏がいるならな。・・・取りあえず別れよう。

瑞季 何で！

陽介 取りあえずな。

瑞季 取りあえず別れろって何？

小春 ねえねえ・・・おかしくない？別れろって言われて「何で」っておかしくない？いなかったら「いないよ」って言うのが先じゃない？い、る、パ、ター、ン、じゃ、ない？

陽介 いるのか？

瑞季 いないよ！

小春 いるよー！これ絶対いるってー！

瑞季 いないよ！なんなの！？

小春 連れて来な！。瑞季彼氏連れて来な！。ママ瑞季の彼氏見たい見たい見



たい！

瑞季 嫌だよ！

陽介 嫌？やっぱりいるのか！

瑞季 いないよ！待って待って！何この話？そんな話じゃなかったんだけど。

小春 そうなの？わかった。瑞季、ママに何でも話してごらん。ママはいつだって、瑞季の話に上手い事返すわ。（しっかりと聞く体勢になる）

瑞季 知らない方向性のやる気だ！凄い戦闘態勢だ！いいよ、求めてないからその方向性は！

陽介 じゃあ何を求めてるんだ？

瑞季 ちゃんとしてよ！今までとは違うの。ロコミサイトとか出来てさ、ウチの旅館の評判なんかが気軽に見れる様になってるの。もっとこの旅館いなくなってお客さんに思ってもらえるようにならないと、そのうちこの旅館潰れちゃうよ？

陽介 ・・・その件に関しましては、一度持ち帰って検討したいと、

瑞季 もういい！

陽介 まあ待て瑞季、パパ考えたぞ。この旅館の一押しポイント。

瑞季 何？

陽介 ロビーがぐっすり眠れる穴場です。

瑞季 ・・・客室で寝かせろ！

瑞季が出て行く。

陽介 怒らせちゃったかな。

小春 ・・・あの年頃のコは難しいから。

陽介 そうだね。

小春 でも、瑞季を見ると、若い時のパパを思い出すわ。

陽介 ・・・え？そう？

小春 そうよ。

陽介 どのあたり？

小春 うーん ・・・頑張る所が偏ってる所？

陽介 ・・・あんまり褒められた部分じゃないんだね？

小春 私たちの娘ですもの。 ・・・謙虚に生きなきゃ。

陽介 ママは人間の鑑だなあ。  
小春 ええー全然！全然そんな事無いよ！  
陽介 あるよ。鑑だよ。

わーわーしながら暗転。

厨房。

織田が夕食の後片付け中。

江藤 ……あー。

織田 どうした？

江藤 世間は連休だなあと思ってたさ。

織田 そうだな。

江藤 疲れるなあと思ってたさ。

織田 そんな事言ってる、瑞季ちゃんが怒るぜ？

江藤 笑えないよ織田さん。あの子凄く怖いんだから。なんであの両親からあんな怖い子が生まれんのか判らないよ。

織田 おう、瑞季ちゃん。

江藤 え！？

織田 冗談だよ。

江藤 止めてよ。瑞季ちゃんに聞かれたらまた怒られ、

瑞季 織田さん、ごちそうさま！

瑞季が食事の盆を持って入ってくる。

江藤 うおー！

織田 おう。そっち置いといてくれ。

瑞季 はーい。え、何？江藤さん。

江藤 何でも無いです……。

瑞季 ……サボリ？

江藤 休憩時間ですよ。

瑞季 あ、そう。織田さん、もう二度とパパにおやつなんか作らなくていいからね！

織田 どうした？喧嘩か？

瑞季 喧嘩じゃありません、説教です。働かざる者食うべからず。

織田 なんかあったのか。

瑞季 あったっていうか無いっていうか何にもしてないんですけど。

織田 ならいいじゃねえか。

瑞季 いや、パパの何もしてないは本当に「何にもしてない」だから。大体ね、店を私物化しすぎなんだよ。織田さんだって自分の仕事の邪魔されて困ってるでしょ？。

織田 いや、手の空いてる時間に作ってるだけだからよ。ついでみたいなもんなさ。

瑞季 ちなみに店の食材使ってるでしょ？

織田 ・・・はい。

瑞季 ダメでしょ？

織田 はい。すみません。

江藤 素直だなあ。

織田 言い訳はしねえよ。したら余計に怒られるからな。

江藤 男前に情けない。

瑞季 まあ。パパが頼りにならないから私達が頑張らないとね。ねえ、ウチが繁盛するなんかいいアイデア無い？

江藤 無いですねえ。

瑞季 江藤さん、ちよっとは考えよう？

江藤 すみません。

瑞季 織田さんは何かアイデア無い？

織田 俺は経営とかはわからねえからなあ。

瑞季 織田さん懐石料理とか作れない？

織田 いいや。懐石はマスタークラスで習うんだ。

江藤 はい？

織田 本橋料理専門学校。俺は日本料理専門・基本クラスしか卒業してねえんだ。でもまあ作れって言われれば作ってみるけども。ちよっとクックパッドで懐石調べてくれ。

瑞季 クックパッドに載ってる懐石料理が旅館で出てきたら嫌じゃない？

畑山が来る。

畑山 洗い物終わりましたあ。

織田 はいよ！

畑山 あ、瑞季ちゃんこんばんはあ。

瑞季 こんばんは。

畑山 あ、江藤さんも。どうしたんですか？私に会いに来たんですか？

江藤 違うけど。

瑞季 由佳里さん。

畑山 ー？どうしたの瑞季ちゃん。

瑞季 今、ウチが繁盛するなんかいいアイデア無いかみんなに聞いてるんです

けど、由佳里さんは何かアイデア無いですか？

畑山 繁盛するアイデアか・・・瑞季ちゃん偉いね。

瑞季 え？

畑山 まだ高校生なのに、おうちの事ちゃんと考えてるなんて、尊敬しちゃう

な。偉いね！私、瑞季ちゃんの事応援してるから。頑張り！

瑞季 あ、ありがとうございます・・・。

畑山 うん！

瑞季 あの・・・質問の、答えは？

畑山 うん？

瑞季 繁盛するアイデアを・・・。

畑山 あ、ごめんなさい！私って本当にドジなんだから。こんな子やっぱりダ

メだよね・・・ね？織田さんだって、そう思うよね？

織田 ・・・・まあな。

畑山 ・・・・織田さん優しいですね。

瑞季 どこが？

畑山 瑞季ちゃん、自分が嫌われるのも顧みず、本当の事を言ってくれる人が一番優しいんだよ？だから織田さんは優しい人。織田さんは、私の憧れです！

織田 うるせえ！

瑞季 織田さん！

織田 すまん。抑えられなかった。

江藤 今のしようがない。事故です事故。  
畑山 ごめんなさい！私が何か気に触る事言っちゃったんですよね？でも……  
真面目な顔の織田さんも素敵でしたよ？  
瑞季 由佳里さん、ちょっと黙ってて！  
畑山 はい。（口にチャックするマイム）  
瑞季 ……えーっと！何かいいアイデアないかなー！（廊下を伺う）あ！史さん！ちよっと！ちよっと来て！

史がやってくる。

史 なんですか？  
瑞季 今！ウチが繁盛するなんかいいアイデア無いかみんなに聞いてるんだけど、史さんは何かない？  
史 繁盛、繁盛ですか……人が集まる……。  
瑞季 そう。何かある？  
史 ありますよ。  
瑞季 本当に！？  
史 教えましょうか？  
瑞季 うん！  
史 まずですね。入り口に有名なキャラクターに似たオブジェを作ります。  
瑞季 却下！  
史 なんでですか？  
江藤 その方法は日本では認められて無いんだよ。  
史 大丈夫です。負けない様にアレンジしますから。  
江藤 あれ？裁判前提で話してる？  
瑞季 却下！  
史 そうですか。  
畑山 史君、ドンマイ！  
史 はい。気にしません。  
瑞季 他に何か意見ある人！……無し！  
江藤 結局何も出ませんでしたね。  
史 僕は出しましたよ？

江藤 ああごめんね。結局いい意見は何も出ませんでしたね。  
瑞季 そんなにさつといい意見は出ないかあ・・・。  
陽介 織田くん。

陽介が厨房にやってくる。

織田 へい。

陽介 明日は生春巻き食べたいなあ。作れる？

織田 生春巻き・・・。

瑞季 ちよっとパパ！なに急にワガママ言ってるの！？

陽介 え？いやいや、パパの為に作るうって言うんじゃないんだよ。お客さんに出そうって、そういう話だよ。パパは余った奴を食べるだけだよ。

瑞季 ほぼ自分の為でしょ？

陽介 そんな事無いよー。

史 嘘ですね。

畑山 ね！

瑞季 だいたい旅館の夕食に出すの？生春巻き。

陽介 うん！

瑞季 うん！じゃないでしょ？

織田 ちよっと待ってください。・・・スイートチリソースの材料があるか確認します。

瑞季 織田さん作るの？てか作れるの？おかしくない？生春巻きは日本料理じゃなくない！？

織田 日本料理が専門でも、日本料理しか作れないわけじゃねえよ。

瑞季 え？なんで懐石料理が作れないのに生春巻きは作れるの！？

織田 普通に考えて生春巻きより懐石料理の方が難しいだろ。

瑞季 でもスイートチリソースは作らなくない？

織田 だまらっしゃい！

江藤 だまらっしゃいって久しぶりに聞いたなあ。

織田 作れる物は作れんだ。社長、生春巻き、明日の夕食でいいですかい？

陽介 いいよ！ありがとう！

織田 いえ。

瑞季 織田さん。パパに甘くない？

畑山 瑞季ちゃん、織田さんは社長に優しいだけじゃなくて、みんなに優しいんだよ？太陽みたいに暖かい人なの。織田さんの近くにいると……ほら、なんだか心まで暖かくなるの。

陽介 畑山さんは可愛いなあ。

江藤 少数意見ですよ、それ。

陽介 ええ？こんなに可愛いのに？

畑山 社長、止めてください！……ちょっと、勘違いしちゃいますから……。

陽介 可愛くない！？

江藤 ちょっと人を選ぶんですよね。

陽介 ええ？……ええ？史君、史君、可愛いよね？

史 はい？

陽介 畑山さん、可愛いよね？

史 畑山さん、可愛い、判りました！

陽介 あ、教えてるんじゃないんだ。聞いているんだ史君。江藤君を見てもダメだ史君。江藤君も首を振らない。

畑山 いいんです社長。社長が可愛いって言うってくれるだけで、私嬉しいですから。

陽介 え？そう？（ニヤニヤしている）

瑞季 パパ。ママに言うよ。

陽介が、ずっと畑山から離れる。

瑞季 もう！本当にだらしない、全てが！

陽介 いや、言うほどじゃないだろう？

瑞季 言うほどだよ！？

陽介 言うほどなのかあ。

江藤 社長、それ怒られる奴ですよ。

陽介 ええ？ただの感想なのに？

江藤 感想言うタイミングじゃなかったんですよ。

瑞季 江藤さん！

江藤 あ、はい！

瑞季 私もう寝るから。なんか良い意見あったら明日聞くから。よろしく。  
江藤 あ、はい。

瑞季が出て行く。

陽介 もう寝るのか？瑞季。風呂には入りなさい。歯も磨きなさい。食べてすぐ寝ると太るぞ。でも早寝は美容にいいんだぞ。成長期は大事だぞ。

江藤 社長、怒らせた自覚ありますか？

陽介 あるけど。

江藤 あるんだ。

陽介 だから今フォローしてたじゃない。

江藤 今のフォローだったんだ。

畑山 社長、瑞季ちゃんにはちゃんと謝った方がいいかも。

陽介 そう？

畑山 そう。男と女の間には言葉にしなきゃ判らない物もあると思う。ううん、言葉にして欲しいの。して欲しいんだよ？史君。

史 はい。

畑山 だから社長。

江藤 あっさりしてたなあ。

畑山 瑞季ちゃんにちゃんと伝えて、ちゃんと仲直りしてあげよう？ね？

陽介 はい！

江藤 それなんですけどね。怒られた所。

陽介 難しいんだよ高校生の娘ってのはさ。特に男親からすればさ。何もしなくても嫌われちゃうからなあ。

江藤 何もしてないつもりなんですわね。

織田 社長。家族だって事に甘えちゃあいけませんよ。最後は一人の人間と人間なんだ。ちゃんと向き合わないと、いつか壊れちゃいますよ。

陽介 織田君・・・そんな真っ当そうな意見を言われると僕の心が壊れちゃうよ？

織田 すいません。

江藤 まあ瑞季ちゃんには明日にでも、僕の方からフォローしときますから。

陽介 あ、頼むよ江藤君。上田家の平穩は君が、君だけが頼りだからね？



江藤 あ、また期待が重い。

陽介 いや、本当に。本当に君の双肩に上田家の未来が……、

暗転。

廊下。

瑞季と江藤が立ち話をしている。

瑞季 いやあり得ないでしょ。パパは。

江藤 いや、そうなんだけどね……。

瑞季 昨日のあの態度、江藤さんも見てたでしょ？全てがだらしない。

江藤 いや、瑞季ちゃんの気持ちも判るよ？でも、上田家の未来の為にね？

瑞季 その未来の為に言ってるの。アレじゃダメでしょ？

江藤 うん、そうなんだけど、社長もね……、

瑞季 ちゃんとして欲しいの私は。それだけ。それだけしか求めてないの。私の言ってる事判るよね？

江藤 判るよ！判る判る！ま、でも平穩の為にね？

瑞季 平穩？何？平穩？

江藤 ごめんなさい！もうなんでもありません……僕には荷が重すぎる……

僕には……上田家の未来は守れません……。

瑞季 ああ、ごめんごめん江藤さん。江藤さんに言い過ぎたね？ほら、飴食べる？ハッカだけど。ハッカの飴食べる？

江藤 ……いりません。

瑞季 そっかそっか。辛いもんね？辛いやつだもんね？甘いのがいいよね？

江藤 すごい子供扱いだ。

瑞季 何かあったかなー。

瑞季

瑞季がお菓子を探していると、テムがやってくる。

テム あ、エトウーさん。

江藤 あ、江藤です。おはようございます。

テム おはようございます。すみません。二階の西側の部屋は空いていますか？

江藤 空いてる部屋もございますけど、どうされました？

テム すみません。えー、同行者があの辺りから城がどんな風に見えるか見た  
いと言っています、

江藤 あ、では今あいてる部屋から見て見ますか？

テム いえ、部屋をとりたいんです。

江藤 ん？

テム 今入ってる部屋と、別に西側の部屋も泊まれる様にして欲しいんです。

江藤 二部屋お使いになりたいってことですか？二部屋分の宿泊代がかかります  
けど。

テム お金は大丈夫です。王がどっちで寝たいって言うか判らないので。

瑞季 王？

江藤 えーっと・・・当旅館、素泊まりは出来ませんので、お食事代も含まれ  
た料金になってしまいますが、それでもよろしいですか？

テム 構いません。私が二人分食べます。

江藤 新しいお部屋分のお食事をキャンセルも出来ますけど？

テム ー、私が二人分食べます。

江藤 お食べになる・・・かしこまりました。では新しいお部屋の方は一名様  
でおとりしていいですか？

テム あ、私もそっちで寝たいかも知れないので二名でお願いします。

江藤 ・・・・よろしいですか？お部屋代が二名様分、

テム お金は大丈夫です。

江藤 そうですか・・・お食事が二名様分になってしまいますが、

テム 私が三人分食べます。

江藤 お食べになる。三人前・・・夜も朝も、

テム 食べます。

江藤 お食べになる・・・かしこまりました。ではお部屋が準備出来次第案内  
させて頂きますので、少々お待ちいただけますか。

テム わかりました。ありがとうございます。

テム深々とお辞儀し、部屋に帰る。

瑞季 江藤さん！

江藤 はい。

瑞季 金持ちだ。

江藤 はい？

瑞季 あの人絶対金持ちだよ！お金は大丈夫って言ったよ！

江藤 いや、まあ言ってみましたけど、

瑞季 ああいうお客さんを掴まえておかなきゃ！金持ちコミュニティで話題の旅館になれば経営安泰だよ！

江藤 金持ちコミュニティ。

瑞季 江藤さん！早速、あのお金持ちの希望調査をしよう！

江藤 希望調査？

瑞季 希望を叶えて、ああーこの旅館は至れり尽くせりだなー、いい旅館だなー、他の金持ちにも紹介しよー、って寸法でしょ？

江藤 えっと、じゃあ何かご不便ありませんかー？って聞きに行くんですか？

瑞季 ううん。つける。

江藤 つける！？

瑞季 だって何にも言っていないのに希望が叶ってる方が感動するじゃない？だからこっそりつけてって、部屋でぼろっと出た本音を叶えるの。どう？

江藤 ……バレたら凄く怒られると思う。

瑞季 ネガティブ！江藤さんはネガティブだよー！

江藤 そうですか？

瑞季 いいから行くよ江藤さん！置いてっちゃうよ！

瑞季がテムを追っていく。

江藤 ……むしろ置いていかれたい。

あとを追う江藤。

暗転。

ホンの客室。

寛ぐホんと端に控えているテム。

テム 仰せの通り部屋を押さえて参りました。

ホン うむ。…噂通りの絶景よの。大須城が目の前ではないか。

テム 城内見学ツアーに申し込んでおきましたので、後ほどお城の中もごらんになって頂けます。

ホン うむ。テムよ、褒めて使わずぞ。

テム ははっ！ありがとうございます！

ホン しかし、日本にも何度か参ったが、このような場所に泊まるのも、面白き事よな。

テム はっ。一国の王にこのような場所はいかがかと思いましたが……。

ホン 良いではないか。庶民の生活を知る事も、王にとっては必要な事であるぞ。特にここ、日本の生活から学ぶべき事は、ピルピン王国の民にも有益であろう。

テム さすがピルピン王国歴代の王の中でも最も聡明でお優しいと名高いホン様でございます。いつでも民を思っておられる。

ホン 民あつての国よ。

テム ははーっ。胸に刻んでおきます。

ホン うむ。余もメモしておこう。

テム さすがホン様。これで忘れても安心でございますね。

ホン ん。

テム 如何致しました？

ホン ペンが書けぬ。

テム ではこれを。(自分のペンを出す。)

ホン うむ。しかし部屋に備え付けのペンが書けぬとは。細かい所まで余を驚かせる部屋よ。それによく見ればこの部屋も風情がある。この掃除が行き届いてない所など、趣きのある事よ。これが世に聞く「侘び寂び」か。

テム きっとそうでございますね。そういえば客室に案内してくれた女性も良い方でした。可憐な花のような……きっと、大和撫子とはああいう方を言うのでしょうか。

ホン 宿がここまで余の想像を越えてくるとは、大須城とは一体どれほどの物か……見学ツアーが楽しみよ。

テム そうでございますね。！……。

ホン いかがでした？

テムがホンに静かにする様に指示し、こっそりと障子に近づく。

テム 曲者！

テムが障子を開け放ち江藤を部屋に投げ入れる。

江藤 痛！

テム おのれ何奴！エトウーさん。

瑞季が逃げる。

江藤 ああ！逃げ……おはようございます……。

ホン うむ。

テム おはようございます。

江藤 ……。

ホン ……其方は曲者か？

江藤 いやいやいや！違います！

テム ではなぜ我々の話を盗み聞きしてたのです？このお方がピルピン王国からお忍びで観光にやってきた王、ホン・テ・クレネンテープ様であると知らずに、なぜ盗み聞きをしていたのです？

江藤 いや、盗み聞きをした訳じゃなくてですね……。

テム ではなぜエトウーさんはお城が見たくてこの旅館をネット予約しただけの我々の身辺を嗅ぎ回っているのです！

江藤 ……いや、嗅ぎ回ってた訳では……。

ホン 其方は余の命を狙っておる暗殺者か？

テム なんと！まさかエトウーさん、貴方は王の命を狙う暗殺者なのですか？

江藤 いやいやいや！いやいやいや！違います！違いますよ！

テム ホン様！取りあえずお下がりにください！

ホン うむ。取りあえず下がろう。

江藤 いや本当に違いますから！

畑山 (部屋の外から) 失礼いたします。

テム ん！何奴？

テムが障子を開ける。

畑山 あ、お茶をお持ちしました。

テム あ！はい！どうぞ！

畑山が茶器を、瑞季がポッドを持ってくる。

瑞季 失礼します。

江藤 あ。

畑山 お待たせしてすみません。

ホソ 頼んだかのう。

畑山 あれ？瑞季ちゃん、このお部屋のお客様に頼まれたんじゃないの？

瑞季 大丈夫！ここで大丈夫だから！

畑山 そう？じゃあここに置きますね。

テム はい！

畑山 あれ？江藤さん何やってるんですか？

江藤 いや・・・それは・・・

畑山 あ！いっけなーい！瑞季ちゃんお茶菓子持って来た？

瑞季 え？

畑山 持ってないよね？申し訳ありませんお客様。お茶菓子を持って来るのを忘れてしまいました。ただ今お待ちしますので少々お待ち頂けますか？

テム はい！

ホソ うむ。

畑山 優しいお客様。では少しだけお待ちください。

瑞季 え？あ？ちよっと、

畑山、瑞季を置いて障子を閉めて戻る。

瑞季 ……じゃ、私も失礼します。

瑞季、江藤を持って部屋を出ようとする。

テム お待ちください。

瑞季 はい！

テム 我々はエトウーさんに用事があるのです。エトウーさんは置いていって頂きましょう。

瑞季 いやー・・・でも江藤さんにも、仕事がありますし・・・。

江藤 そう！そうですよね！

テム そんな問題ではありません。ホン様はエトウーさんに殺されそうになったのですよ！

瑞季 え！？何したの江藤さん！？この短い時間に。

江藤 違いますよ誤解ですよ、部屋の様子を伺ってたのを拡大解釈されて、

テム エトウーさん。やはり部屋の様子を伺ってたのですね。

江藤 あ。

瑞季 馬鹿！違うんですよ、江藤さんはその・・・仕事熱心なあまり、お客様  
の事をよく知ろうととしてつい廊下で一人聞き耳を立ててしまう・・・  
そういう残念な大人なんです。

江藤 なんてそんな事言うのさ！瑞季ちゃんがやろうって言うから付き合っ  
たんであって、

瑞季 わー！わー！え、わー！

ホン 娘。

瑞季 は、はい。

ホン 其方がエトウーに余達の事を調べさせたのか？

瑞季 滅相もございませぬ！

江藤 瑞季ちゃん、口調が。

ホン 其方は関係ないと？

瑞季 ははっ！江藤さんがやった事は手前の与り知らぬ所でございます！

江藤 ちよっと！

ホン ふむ、其方は余の身边を嗅ぎ回る不屈きな輩ではないと？

瑞季 王様にそのようなご無礼を働くはさすがにございませぬ！

ホン 娘。

瑞季 ははっ！

ホン 何故、余が王だと知っている。

瑞季 ・・・。

テム 娘。座りなさい。

瑞季 はい。

テム 正座。

瑞季 はい。

瑞季が江藤の横に正座する。

ホン 其方達は、余の身边で何を企んでおるのだ？

瑞季 いや！企んでる事なんか無いんです！本当に、純粹に、お客様の意見が聞きたくてですね。つい……つい、出来心で……、

ホン ふむ……どう思う、テム？

テム 嘘だと思えます。

瑞季 本当ですって！

テム 宿の従業員が一介の客の部屋を盗み聞きするなどあり得ません。

江藤 そこは本当にすみません。

テム この者達はホン様がピルピン国王だと知って近づいたのは明白です。

江藤 違うのに……。

瑞季 すみません！あの……本当の事を言います。

ホン うむ。申してみよ。

瑞季 この部屋の事を伺ったのはですね、王様だと知っていた訳ではなくてですね……その……金持ってそうだったので……。

テム ん？

瑞季 あの、お金持ちのお客様に見えたので、お近づきになろうと……。

ホン なるほど。物乞いか。

瑞季 違います！あの……実は私、この旅館の娘です。

ホン ほう。

瑞季 その、王様に、この宿のリピーターになって頂きたくてですね……その為に王様の希望をお聞きしたくて、つい。

テム なぜはつきり聞かずに盗み聞きなどしたのです。

瑞季 そっちの方が感動するかなって……以心伝心的な。

テム ふむ……。

瑞季 ……あのちなみに。



テム なんですか？

瑞季 掃除が行き届いてないのって、何処ですか？

ホン その障子の棧がのう。

瑞季 あ、じゃあちよっと失礼して（瑞季立ち上がり見に行く）．．．あ、本当だ。江藤さん。

江藤 はい。

瑞季 あとで史さんに言っておいて。棧の部分もちゃんと見る様に。

江藤 判りました。

ホン 娘。

瑞季 あ、はい！

ホン 其方は余に害する為でなく、余の為にあらんとしたと、そう申すのだな？

瑞季 まあ．．．．はい。

ホン うむ．．．どう思うテム。

テム はっ。非常に齒切れが悪いかと。

ホン そうよな。

江藤 本当だよ。なんでそんなに溜めちゃったの？

瑞季 いや、王様の為かって言われると違うような．．．。

ホン ふむ．．．テムよ。余はこの者達を信じる事とする。

瑞季 え？

ホン 余を騙す気なら、あのように齒切れが悪くてはダメであろう。ゆえにこの者達は本当に客の希望を聞く為に、客室に聞き耳をたてる者達であると信じよう。

江藤 あれ？信じてもらったのにあまりプラスに感じられない。

テム ははっ。ホン様がそう仰るなら異論はありません。

ホン うむ。

瑞季 あの．．．お客様は、

ホン ホンである。

瑞季 ホン様は本当に外国の王様なんですか？

テム ピルピン王国国王ホン・テ・クレネンテープ様です。

瑞季 でも随分流暢に日本語話してますけど。

テム ああこれは日本語ではありません。

瑞季 え？

テム 私たちが話しているのはピルピン語です。

江藤 ピルピン語？

瑞季 日本語にしか聞こえませんが。

ホン ピルピン語はピルピンが第二次世界大戦で日本に一時的に統治されていた時に日本の教科書によって広まったと言われている。

瑞季 それ日本語なんじゃ……。

ホン 其方がそーいいたい気持ちもわかるがな。先々代の王である祖父がこう申しておった「独立後の国際会議で『公用語は日本語のままです。いきます。』とは、とても言える雰囲気では無かった」と。ゆえにこれはピルピン語なのだ。

瑞季 大人の事情なんですね。

ホン うむ。事情よ。大人のな。

畑山 失礼します。お客様、お茶菓子お持ちしました。

テム あ！はい！どうぞ！

畑山が入ってくる。

畑山 お待たせしましたあ。あれ？江藤さん達まだいたんですか？ひよっとして、私が戻って来るのを待ってました？

江藤 違います。(テムに睨まれる) いや本当に違いますって！

畑山 可愛い人。あ、お客様お待たせしました。お茶菓子なーんだ？

テム え？

畑山 ですから、お茶菓子なーんだ？

江藤 君がなんなんだ。

ホン まめ大福。

畑山 あーおいしい！お客様、お茶菓子なーんだ？

テム え？……あ、えーっと……可愛い……あの、いちご大福。

畑山 あー美味しい！正解は？栗どら焼き！

テム ああ、まめ大福と大分違う。

瑞季 すみません。それこの辺の名物なんです。

テム でもそこも可愛い。

畑山 では失礼します。江藤さんと瑞季ちゃんもお客様の部屋に長居しちゃダ

メですよ？

瑞季 あ、はい。

畑山 ではお客様。ごゆっくりお過ごしくださいね。

畑山が出て行く。

テム ああ……。ホン様、ゆっくり過ぎました。

ホン ならぬ。

テム え？

ホン 城内見学ツアーに遅れる訳にはいかぬ。

テム あ！もうこんな時間に。向かいますよ！

ホン うむ。其方達ももういくが良い。今回の事は不問と致そう。

江藤 いいんですか？

ホン まあ……。よい。

テム ホン様の寛大なお心に感謝する様に。

江藤 あ、はい。申し訳ありませんでした。

ホン うむ。では行くぞテム。一路、大須城。

ホンが先行して出て行く。

テム ホン様お待ちください！カメラなどお持ちしますので！

テムは奥へ荷物をとりにいく。

瑞季 変なお客さん。

江藤 やっぱり怒られたじゃないですか。

瑞季 ・・・挽回しなきゃね。

江藤 ええ！？

瑞季 汚名、返上！（拳を突き上げる）

江藤 まだやるの？

瑞季 だってこのままじゃただ従業員に盗み聞きされる旅館だよ？また行きたいと思っ？

江藤 二度と行かないです。ロコミサイトにボロクソに書きます。

瑞季 でしょう？・・・私たち、もう後戻り出来ない所まで来ちゃったんだよ。

江藤 ・・・・誰の所為でこうなったと思ってます？

瑞季 江藤さん、早速挽回策を考えよう！

瑞季部屋を出て行く。

江藤 もう何もしない方がマシだと思えますよー！

瑞季 江藤さん早くー！

江藤もあとを追う。

暗転。

ホンとテムが通りかかる。

ホン おお！見よテム。こんなにも民が疲弊しておるではないか。

テム そうでございますね。このような暗く狭い場所で息を殺していれば仕方ない事かもしれません。

ホン このような惨状は捨ておけぬ。余はここに「国民の休憩」を制定する。

テム さすがピルピン王国歴代の王の中でも最も聡明でお優しいと名高いホン様でございます。

ホン うむ。王であれば当然よ。

テム ホン様、休憩はいかほどとりましょう？

ホン そうよのう。切り良く、60秒とする。

テム ははっ。ちょうど良い長さです。

ホン 其方めらもしばし体を伸ばすなりしてゆるりと過ごすが良い。

テム では皆の者、王様のご命令である。全員休憩！王様の命令は？絶対！

暗転。休憩。

畑山がやって来る。

畑山 どうしたの、こんな所で？あ、ちょっと座ろっか。大丈夫？椅子、冷たくない？（江藤が怪訝な顔で出て来る）そっか。冷たかったら温めてあ

げようと思ったのにな・・・ううん、言わないで。判ってる・・・休憩、  
終わりなんでしょ？そう。もうそんなに経っちゃったんだね。全然！全  
然大丈夫。だって始めからそういう約束だったもんね？

江藤 畑山さん？

畑山 あ・・・私もう行かなきゃ。少しの間だったけど、休めて良かった。で  
も・・・こんな休憩、もう二度と無いんだからね？

江藤 何言ってるの？働いてくれる？

畑山 それじゃあまた・・・ううん、Good bye 私の休憩。(畑山去る)

江藤 何の話してんの？働いてくれる？畑山さん？

江藤が畑山を追っていく。

厨房。

生春巻きを持つ陽介と織田。

陽介 織田くん。

織田 へい。

陽介 この生春巻きなんだけどさ・・・すっごくいい生だね？

織田 ・・・・生春巻きですから。

陽介 そうなんだけどね・・・なんて言うのかな・・・臭い。

織田 ・・・・

陽介 いやいや、違うよ？美味しいよ？美味しい部分もあるよ？臭いけど。

織田 ・・・・

陽介 あれ！？一回待とう？これ、この春巻き美味しいの。特にこれ？スイー  
トチリソース？このなんかのっぺりした奴？美味しい。で、こっからが  
本題ね？これ・・・臭い。あー違う！上手く言えないなあ！

織田 パクチーですか？

陽介 え？

織田 香草です。独特の臭みがあるんでね、苦手な人も多いんですよ。

陽介 あ、そうなの？そうかあ。パクチーかあ・・・織田君、パクチーって臭  
いね！

織田 ・・・・そうですね。

瑞季と江藤が入ってくる。

瑞季 何も思いつかないなあ。

江藤 もう良いじゃないですか。明日には帰るんですからもう時間切れですよ。

瑞季 最後まで諦めちゃダメだって。織田さん、夕食持っていくのはもう無い？

織田 おう。史が全部持って行ったぞ。

瑞季 あ、そう。夕食・・・食後でなにか・・・。

陽介 なあ瑞季。

瑞季 何、パパ。

陽介 この生春巻き臭いだろ？

瑞季 はあ！？

陽介 いや、この生春巻き、臭いだろ？

瑞季 ちよっと！え？なんて事言うの？・・・織田さんごめんなさい！はあ？

パパ！・・・はあ？臭くないし！

陽介 え？臭いだろこれ。

瑞季 臭くないよ！

陽介 臭いだろ？

瑞季 臭くないよ！

陽介 ええ？・・・(臭いを嗅ぐ)

瑞季 臭い嗅ぐの止めてよ！

陽介 やっぱ臭いよ。

瑞季 臭くないよ！

江藤 社長凄いですね。

陽介 いや、これなんで臭いか、知ってる？

瑞季 臭くないよ！織田さん、臭くないからね？

織田 いや、臭いって言う社長の意見も判りませんがね・・・。

瑞季 ・・・・織田さんへこんでるでしょ！なんでそんな事言うの？

陽介 だって臭いでしょ？

瑞季 臭くないよ！

陽介 いや、

瑞季 判った！もう判った！ちよっとは臭いよ！それはごめんなさい。悪気は

無いの。パパがそういうから、ね？織田さん、それはごめんなさい。で

も！それは織田さんが悪いの？違うでしょ？織田さんが臭いの？違うでしょ？そういう事言うの止めな？

陽介 だから、これちよっと臭いでしょ？

瑞季 うん。織田さん臭くないからね？ごめんね？それで？

陽介 これ、中に入ってるパクチーっていう香草が臭いんだって。

瑞季 ・・・織田さん臭くないじゃん！

江藤 それは誰も言っていないよ瑞季ちゃん。

瑞季 紛らわしい事言わないでよ！ごめんね織田さん？織田さんは悪くないって。臭いのはパクチーだって。織田さん大丈夫？

織田 気にしねえでくれ・・。

史が入ってくる。

史 あ、社長。

陽介 どうしたの史君。

史 あのですね。お客様がこの生春巻きを作ったのは誰だと仰ってますね。

陽介 え？

史 この生春巻きは誰だと仰ってますね。

江藤 大分意味変わっちゃったけど。

史 この生春巻きを作った人を出せと仰ってますね。

江藤 え？何、怒ってるの？

瑞季 ほらー！パパが生春巻き入れようとか言うから。

陽介 ええ！？パパの所為か？

織田 なんだ、その客は俺が作った生春巻きに文句があるのか。臭いのか？

江藤 まあまあ織田さん。取りあえず、僕が謝りに行きますんで。史君、どこ  
の部屋？

史 あ、作った人を出せと仰ったので、ここまでお連れしましたが、厨房  
に入れていいですか？

江藤 ・・・ん？

史 あの生春巻きを作った人を出せて仰ったお客様は、ここまでお連れし  
ましたけど、厨房に入れても大丈夫ですか？・・衛生的に。

江藤 ・・・史君。

史 はい。

江藤 もっと気にする所があったよう・・・。

史 失礼しました。(奥に) 気にせずどうぞ。

江藤 ああ、そういう意味じゃないんだけど！

江藤が外で話そうと出て行く前にホンとテムが厨房に入ってくる。

陽介と瑞季は俯き、織田は背を向ける。

江藤 ああホン・・・田様。

ホン 余がホンだ。皆のもの表をあげよ。

俯いていた陽介、瑞季が顔を上げる。

ホン 夕餉に供された生春巻きを作ったものがここにおると聞いたが、誰ぞ。

江藤、陽介、瑞季が織田を見る。織田は視線を感じている。

織田 申し訳ありませんでした！

ホン 其方か。其方が作ったこの生春巻き、まっこと美味であった。

陽介 え？

瑞季 美味しかったですか？

ホン うむ。

瑞季 なんだよ。

江藤 瑞季ちゃん。

ホン 日本の食材を使っていながらここまで本場の味に近づけるとは。何度か日本に来てはいるが、ここまでの品は始めてであった。

陽介 日本に来て？

瑞季 ああ、えっと、

ホン 特に、このスイートチリソースは一般的な物とは違っておるな・・・  
ベニアズマとか、そういう何かを使っておろう。

江藤 ああ、だからあんなにのべっとしてるのか。

ホン これはピルピンの宮廷で出てくるものに似ておる。



陽介 この人なんなの？

テム お忍びでの来日であったため身分を隠しておりましたが、こちらにおわしますはピルピン王国国王、ホン・テ・クレネンテープ様なのです。

陽介 え！？え？なに？何？王様なの？

テム 王様、王様。

陽介 何処？何処？

テム ピルピン、ピルピン。東南アジア。

陽介 東南アジア。へー！あ！・・・ニホンゴ、ウマイデスネ？

テム これはピルピン語です。

陽介 ピルピンゴ？ピルピンゴデスカ？

テム はい。

瑞季 パパが片言になつてる意味が判らない。

ホン この生春巻きを作った其方を褒めて遣わす。さあ、余に顔を見せてみよ。

織田 ・・・・。

ホン さあ。

織田、ゆっくりと振り返る。

ホン やはり、其方か。

織田 よもやこんな所でお目にかかるとは思いませんでした。

瑞季 織田さん？

織田 いえ、余は織田ではありません。余はワリヤン・スー・クレネンテープ。

瑞季 ワリヤン・・・？

ホン 四年前に国を出た、余の弟だ。

江藤 弟？

織田 六年前です。

ホン だいたいな。だいたい四年前だ。六年はだいたい四年だ。

瑞季 大分違いますけど。

織田 おかわりありませんね兄上。しかし余は兄上の、いえ、ピルピンのそういう所を疎ましゅう思っておるのです。

瑞季 え？

織田 兄上は何故この宿へお出でになったのです？

ホン 偶然な。城がよく見える宿という触れ込みゆえ訪ねてみたが、まさか其方とこんな所でのう・・・健勝であったか？

織田 ご心配には及びませぬ。

ホン どれ、顔を見せてみよ。

織田 いえ、

ホン いいではないか見せてみよ。

ホン、織田の顔を強引に見に行く。

織田 いえ、お止めください。

ホン いいではないか。

江藤 本当に嫌がってるんでもう止めた方が・・・。

テム ホン様、ホン様！

ホン む、そうか。まあよい。このちはいつでも見えよう。テム、帰りの飛行機の席を一席増やすのだ。ワリヤンをピルピンに連れ帰ってやろう。

テム ははっ！

瑞季 ええ！？

織田 兄上。

ホン ここで会ったも何かの縁。共にピルピンに帰るぞ、ワリヤン。

織田 ・・・帰りませぬ。

ホン あなや。

江藤 あなや？

ホン 何故？何故帰らぬと申すか。

織田 兄上は、先程の余の言葉をお聞き遊ばされなかったのですか？余は兄上を、ピルピンを、疎ましゆう思っておると申したはず。故に帰りませぬ。

テム ワリヤン様。ピルピンの何処がお気に召さないのでですか？

織田 兄上を見れば判るであろう。何事にもだらしが無く流されるままに生きておる。ピルピンは国全体がそのような体たらく。そのような体たらしなき国、見捨てられるも仕方なき事。

ホン なるほど。其方の言う事も尤もである。其方は日本に残るが良からう。

テム そうでございますね。

江藤 そういう所が気に入らないんだと思いますよ？

織田　　そういう所が気に入らぬのです。

江藤　ほら。

ホン　なるほどのう。では、強引に連れ帰るとしよう。テム。

テム　はっ！さあワリヤン様、帰りましょう。

織田　帰らぬ！余は、余は帰りませぬぞ！お放し召されい！

強引に連れ返そうとするホンとテム。抗う織田。

瑞季　あ、ちよっと！待ってください！止めてください！

瑞季と江藤が止めに入る。史と陽介はぼーっとしている。

瑞季　史さん！史さんも止めて！

史　判りました。まあまあ。まあまあ。 (手は出さない)

瑞季　もっと効果的な止め方して！

ホン　むう (諦める)・・・一体其方はどうしたいのだ？

織田　余はただ・・・このまま。ピルピンに帰る気はございませぬ。兄上達お二人でお帰りくださいませ。

織田、奥へと引っ込んでしまふ。

ホン　ワリヤン！・・・怒らせてしまったかのう。

テム　あの年頃は難しいですから。三十路前後は。

瑞季　あの・・・

ホン　どうした娘？

瑞季　織田さん・・・ワリヤンさん、連れて帰るつもりなんですか？

ホン　うむ。連れ帰り、国を挙げて迎えてやるのは兄として当然の事。ワリヤンの存在を思い出せば、民も喜ぶであらう。

瑞季　そうですか・・・

ホン　どうした娘。

瑞季　いやー、ウチの旅館としては、織田さんを連れて行かれるのはちよっと困ると言うか・・・。ねえ。パパ？

陽介 え？そうか？

瑞季 板前さんいなくなったら困るでしょ。

陽介 ああ。それは思いつかなかったなあ。

瑞季 一番最初に思いつくでしょ。現実問題、織田さんがなくなったら厨房回らないから。

テム なるほど。ワリヤン様を急に連れて帰れば、こちらの旅館がお困りになる事は判ります。しかしこれはビルピン王国国王たつての希望。ついてはビルピンと日本の国際問題でもありません。

江藤 話が大きくなってきた。

テム 我々としてもお忍びでの観光ですので事を大きくしたくはない。どうでしょう。お金で解決と言つのは。

瑞季 ……

テム お金ならあります！

瑞季 わかりました！

江藤 瑞季ちゃんってゲスよりのリアリストだよね。

陽介 ちよつと待ちなさい、瑞季。そんなに簡単に決める事じゃないだろう。

瑞季 パパ。

陽介 お客様。私、この旅館の社長の上田と申します。

ホン 其方が上田屋の主人か。

陽介 はい。上田屋を代表して申し上げますが、こういう事は本人の希望もありますので、今すぐお返事する事は出来かねます。後日、お帰りになつてからまた改めてご連絡させて頂きますので今回はご容赦いただけないでしょうか？

瑞季 パパ……

史 ちゃんと話せるんですね。

陽介 見直した？

史 いいえ。

テム ホン様。いかがいたしましたしょう？

ホン ならぬ。

陽介 ええー？

江藤 一蹴されちゃいましたね。

ホン しかし、急に連れ帰っては其方達が困るといふのも道理。よって其方達

に一日時間をやろう。

瑞季 は？

ホン 余がこの宿にもう一泊するゆえ、明日一日のうちにワリヤンと別れる準備をするが良からう。

テム さすがピルピン王国歴代の王の中で最も聡明でお優しいホン様。

陽介 一日？

ホン うむ。ではテム、早速部屋へと帰り連絡せよ。

テム ははっ！本国へ出立を一日延ばすと伝えておきます。

ホン いや、先に明日の大須城見学ツアーへ申し込むのだ。余は、まだまだ城が見たい。

テム かしこまりました。

ホンとテムが出て行く。

陽介 ・・・・ええー？

江藤 困りましたね。

陽介 困ったなあ。一日？一日でなにしろっての？ええー・・・。

瑞季 ・・・・パパが反対すると思わなかった。

陽介 え？

瑞季 織田さん連れてかれちゃうの。

史 瑞季さん一瞬で切り捨てましたもんね。

瑞季 うん、まあ・・・でもちょっと反省した。パパはちゃんと織田さんの気持ち考えてたもんね。

陽介 まあね。実際瑞季が言った様に、織田君がいなくなった厨房が回らないからね。板前を募集して、面接して、採用して、ウチに慣れて、それから織田君には帰ってもらわないとな。

瑞季 ・・・・あれ？織田さんの気持ちは？

陽介 そこはそれまでになんとかなるだろ。ならなかったら首にすればいいんじゃないかな。

江藤 ドライ。

瑞季 私の反省返して。

陽介 しかし一日じゃ新しい板前なんか見つからないしなあ・・・。

史 僕がなってあげましょうか？板前。

江藤 え？

陽介 史君、料理得意なの？

史 いいえ。

江藤 じゃあなんであんな上から……。

史 料理は作った事無いですけど昔から手先が器用な事を褒められます。

陽介 そうなの？

史 ここで働く前は、パスポートとか免許証を作っていました。

江藤 パスポート？

史 ビザが無い人用に、僕がパスポートを手作りしてあげたり、

陽介 史君、それダメなやつだ。絶対に人に言ってはダメな奴だ。

史 なるほど。でもパスポートを作ってあげるとみんな喜んでいましたし、僕もお金がもらえましたし、*ミヨミヨ*の関係でした。

江藤 *ミヨミヨ*の関係じゃないんで、あ、過去形か。

史 ですから大丈夫です。桂剥き。

江藤 板前に必要なスキルは決してそれだけじゃないんだよ？

陽介 うん・・・いける。

江藤 いけますか？

陽介 僕は史君に一筋の希望の光を見た。これで面倒事をしなくていいという希望を。

江藤 ああ、働きたくないだけなんですな。

陽介 いやいや、みんなの希望を叶える最善策を導き出しただけじゃない。

瑞季 その最善策って織田さんの希望は入ってるの？

陽介 織田君だって本当は家族のもとに帰りたいに決まってるさ。家族なんだから。さ、そうと決まったら史君、試しに料理してみようか。

史 はい。

陽介 江藤君はホンさん達の明日の部屋押さえてきて。

江藤 あ、はい。

陽介 史君は何か料理を作った事ないの？

史 ー、どぶろく。

陽介 あ、密造だね！

陽介と史が厨房奥に、江藤が部屋を取りに向かう。一人残される瑞季。

暗転。

休憩室。

小春と畑山がおしゃべり中。少し離れて瑞季。

小春 それで朝からみんなでお料理してるの？

畑山 そうなんですよ。織田さんが朝食作ってるの見ながら、史君にも覚えてもらおうって。

小春 へー、そうなんだ。

畑山 頑張ってる男の人って素敵ですよ。

小春 判るー、それ凄い判るー。瑞季判る？

瑞季 判んない。

小春 えー？格好良くない？普段全然意識してなかったのに、あれ？って。

畑山 判るー。

小春 「あれ？こいつやりおる」って。

瑞季 パパ頑張ってる無いじゃん。

小春 頑張ってるのに格好いいって、凄くない？

瑞季 パパに対する評価が甘すぎる。

小春 でも頑張ってる男が格好いいのは間違いないよね。

畑山 そうですよ！もう私も影から見ててキュンキュンして！「みんな、頑張れ！」って。

小春 判るー。明子みたいな感じでしょ？

瑞季 誰？

小春 え？明子判るよね？

畑山 ごめんなさい、それは判らないです。

小春 えー？星明子。巨人の星。わかー、らーない？オッケー流して。頑張ってる男キュンキュンするよねー！

畑山 しますよねー！

瑞季 パパに言うよ？

小春 そういうんじゃないの瑞季。キュンキュンは別なの。  
瑞季 キモいよ。

小春 キモくないよ、キュンキュンは。キュンキュンはキモくないんだよ？  
畑山 瑞季ちゃん、キュンキュンは女の子を綺麗にする魔法なんだよ？  
瑞季 やっぱキモいよ！  
小春 そっか。まだ判らないか。・・・でも覚えておいて瑞季。恋は別腹。  
瑞季 娘にそういう事言うの止めて！  
畑山 えー、でも判るー。小春さんそういう、  
小春 いやいや、一般論ね、一般論。ウチはそういうの無いから。パパは。パパ  
だけで充分だから。  
畑山 えー？小春さんラブラブー。いいなー。  
小春 そんなことないよー。  
畑山 あるよー、小春さんの話もっと聞きたいなあ。  
小春 ああ！・・・どうしよう瑞季！このままではママ、由佳里ちゃんに全て  
話してしまいそう！愛のFBIが来たわ！  
瑞季 来てないよ！

織田が入ってくる。

織田 はあ・・・。  
小春 あ、織田さんお疲れ様。  
畑山 お疲れ様です。  
織田 どうも。  
小春 織田さん、外国の王様一家なんだって？  
織田 ・・・・誰に聞いたんです？  
小春 ・・・・瑞季。  
瑞季 パパでしょ！  
小春 瑞季も話に入れてあげようって気遣いじゃない。  
瑞季 だとしてタイミング悪すぎるでしょ？私が怒られるじゃない！  
織田 怒りはしませんがね。・・・もうあの家とは縁を切ったんです。俺の事は  
今まで通り1人の織田家康として扱ってください。  
畑山 私、織田さんの名前始めて聞きました。  
小春 ウチでは天下糴りそうだねって超話題になったけど。  
陽介 織田くん！



陽介がやってくる。

陽介 織田君、もうちょっと付き合ってよ。

織田 そういわれましてもね……。

瑞季 どうしたの？

陽介 いや、織田君にね、史君に料理を教えて欲しいんだけど。

織田 そんな一朝一夕に教えられるもんじゃないんですよ。

陽介 そうだけどさ、そこをなんとか。

織田 そう簡単に言われましても、俺だって二年間、きっちり修行してきたんです。それを一日で教えるなんてのは土台無理な話なんですよ。

陽介 そうかも知れないけどさ。触りだけでもさ？

織田 ……まあ教えるのは構いませんがね。教えた所でどうするんです？俺はここを辞める気も、国に帰る気もありませんよ。

陽介 織田君……。

テム 失礼します。

テムがやってくる。

陽介 あ、ここは従業員の部屋なんでお客様はご遠慮いただいているんですけど。失礼しました。しかしこちらにワリヤン様がいると伺ったものですから。

陽介 ああ。織田君、お客さん。

織田 帰ってもらってください。

陽介 いいの？

テム ワリヤン様！テムでございます。幼少の頃からお仕えしているテム・フルワ・パトチャイでございます。お覚えではございませんか？

織田 余はそのようなものは知らぬ。

小春 え？織田さんどうしたの？

瑞季 自分の国ではこういう喋り方みたい。

テム ワリヤン様……実はホン様から後ほど一緒に大須城を見て回らないかとお誘いがございました。

織田 余は行かぬ。余は旅館の客共らへ夕餉を作らねばならぬのだ。

テム そうでございますか……では夕食のあとにでも、ホン様のお部屋に、

織田 テムよ。

テム はっ。

織田 余は王家を離れ、今は料理人へと身をやつしておるのだ。もはや兄上とは縁遠きものと思っていたらきたい。

テム しかし、

織田 余はこの者共への昼餉の準備があるゆえ、兄上には直ちにお帰りになられる様に伝えおけ。

陽介 なあ織田君。

織田 そういふことですから、失礼します。

織田、部屋を出て行く。

陽介 織田君！……この者共って言い方は無いんじゃないかな。僕社長なんだけどー……行っちゃった。

瑞季 パパ細かい。

陽介 そうだろう。

小春 パパは細かい所まで気がつく時もあるんだよね！

陽介 そうなんだよね。

畑山 小春さんラブラブー。

テム はっ！

小春 えー、そんな事ないし！ラブラブじゃないし！普通だし！これ普通だし！あ、そっちの方が恥ずかしい。キャー！穴があったら皆埋めたい！

瑞季 自分が入るんじゃないんだ。あ、ママ！お客さんいるから。

小春 あ、そうね。えーっとテム様。お茶でも飲んでいかれます？

テム あ！いえ！はい！……結構です！

小春 結構？決行？結構飲んでいく事を決行？

瑞季 どう考えてもいらぬ方だったでしょ？

小春 えー？いいじゃない。一杯だけ。ママ外国の方のお話聞くの大好きなんだもの。由佳里ちゃんだって聞きたいよね？

畑山 そうですね。ちょっと興味あるかも。

テム え！……え！

小春 おや？・・・テム様あ。テム様あ。  
テム あ、はい！あ、テムで結構です。  
小春 じゃテムう。  
瑞季 本当に呼んだ！ママ、お客様だからね？  
テム いえ、構いません。何でしょう？えーっと・・・、  
小春 私、小春。あれ主人の陽介。ここの社長。  
テム と言う事は、女将。  
小春 そう。全然働いてないけど。あれ娘。瑞季。  
テム ああ、存じております。  
小春 そして、由佳里ちゃん。  
テム ・・・・えーっと・・・、  
畑山 畑山由佳里です。由佳里って呼んでください。  
テム え！？・・・あ・・・はい・・・。  
小春 テム、呼ばなきやダメじゃん。  
テム え？  
小春 由佳里って呼んでくださいって言ってたじゃん。  
瑞季 ママ？  
小春 ほら、テム。  
テム え・・・あ・・・ゆ、由佳里、さん・・・。  
畑山 はい。  
テム はふおっ！

畑山の笑顔にたまらず飛び退くテム。

陽介 あれ？大丈夫？  
テム 問題ありません！少々心臓の鼓動が乱れただけです。  
瑞季 それは大分問題だと思えますけど。  
テム やはり、お茶を一杯いただけますでしょうか？  
小春 いいわよ。  
畑山 あ、私淹れてきます。  
小春 あ、いいのよ、由佳里ちゃんは座ってて！むしろ！座ってて。私が淹れて来ると見れない！瑞季、お茶淹れてきてくれない？

瑞季 え？

畑山 あ、いいですよ。私のももう無いんで淹れてきます。テムさん・・・ちよっとだけ待っててくださいね。

畑山がお茶を汲みにいく。

テム ああ・・・。

小春 テムよ。

テム は、はい。

小春 あなた、由佳里ちゃんが好きなの？

陽介 え？そうなの？

テム バ、バカな事を仰らないでいただきたい。なぜそのような誤解をなさったのか、具体的にお教え願いたい！私の何処から！あの方を好きな気持ち溢れ出てしまったのか！

瑞季 今全部言っちゃってますよ？

テム はっ！（しばらく悶える）

瑞季 あ、バカだ、あ、正直者だこの人。

テム ・・・・バれてしまったのでは仕方ありません。私は「由佳里さん（小声）」が好きなのです。笑いたくば笑うといいでしょう！（耐える姿勢）

瑞季 笑いませんよ。

小春 テム、愛はね、恥ずかしい事じゃないのよ？むしろ誇るべき事よ。私は応援してるわ。

テム あ、ありがとうございます！

小春 ほら、泣かないの。

テム すみません。こんな気持ちは始めてで、私1人ではどうしたらいいのかさっぱり判らなくて。

小春 それはもちろん告白よ。

瑞季 ママ？

テム 告白？

小春 女の子は男の子の告白を待ってるんだぞ？

陽介 「待ってるんだぞ？」？

テム そうなんですか！

小春 そうよ。そしていつも待ちぼうけなのよ。

テム そうだったんですか。

小春 そうだったんですの。

陽介 ママちよっと調子に乗ってるでしょ？

小春 そんな事ないわよ！。

テム 先生！

瑞季 先生！？

テム 女将は私の恋の先生です。先生と御呼びしてもよろしいですか？

小春 ・ ・ ・ 師匠と呼びなさい。

テム 師匠！

陽介 凄い調子に乗ってるじゃん！ ・ ・ ・ すっごいニヤニヤ！ すっごいニヤニヤしてるよ？

史がやってくる。

史 織田さん知りませんか？

瑞季 向こうに言ったけど。どうしたの？

史 織田さんがいないと厨房が片付かないですね。

陽介 そうか。まあ片付けは後でいいよ。

史 そうですか？

瑞季 まあ、織田さんはちよっと1人にしてあげた方がいいかも。

史 なんですか？

瑞季 まあその ・ ・ ・ ちよっと家の事とか、あるんだろうし。

史 家の事。織田さんは嘘をついていますもんね。

瑞季 ん？ どういう事？

史 1人で外国で暮らすのは寂しいです。私もよく一族郎党の事を思い出します。辛い時はみんなの事を思い出して泣きます。お金を貰った時はみんなの事が頭の隅をよぎります。

瑞季 そうなんだ。

史 そうなんだ。織田さんもそうです。離れていると一族の良さが判るものです。帰りたい気持ちはみんな同じです。もしかして、織田さんは帰りたいくても帰れないんじゃないですか。

瑞季 え？

史 公安に目を付けられているとか。私の国で帰って来ない人は大体そうです。

瑞季 あ、うん。そうかもね。ありがとう参考になった。

史 どうも。

小春 史君もこっち来て恋バナしよー。

史 恋バナですか？

小春 そう。テムの。

テム 師匠！

史 女将は師匠なんですか？

小春 そう。史君も弟子になる？

史 いいですよー。

騒ぐ奴らと考え事をする瑞季。

暗転。

廊下。ホンが1人で大須城を眺めている。

ホン 廊下から眺める大須城もまた違った趣きよ。まっこと素晴らしき眺め。

どれ、一句詠むとするか。大須城、

瑞季が考え事をしながら通りかかる。

ホン 娘、歩く、考える。・・・侘び寂びよのう。

瑞季 (ホンに気付く) うわ、ホンさ、ま。

ホン よいよい。そうかしこまらずとも良い。子は気など使わずとも良いのだ。

瑞季 言うほど子供でもないのですが・・・。じゃあ、失礼します。

ホン 娘。そう急がずとも良かるう。其方も大須城を見てみよ。雄大にして優

美よのう。

瑞季 ああ、そうですね。

ホン ふふふ、娘。其方にはあまり珍しくもないのだろがな、この景色には

確かな価値があるのだ。この景色を見る為にここを訪れる者も多かるう。

瑞季 確かにウチの旅館は大須城が見えなかったらとっくに潰れてると思いま

すけど・・・。

ホﾝ そうであるう。不思議よのう。どんなに価値があるものでもそばにあるとその価値を忘れてしまふ。離れてみて、やっと思い出すのだ。

瑞季 ・ ・ ・ 織田、ワリヤンさんと離れて大切さを思い出したんですか？

ホﾝ いや、六年も前の事ゆえ、ワリヤンの存在は忘れておった。

瑞季 全然、言ってる事が！

ホﾝ 忘れておったが、久方ぶりに会ってみて、大切さを思い出した。家族とは不思議なものよのう。

瑞季 そうですか。

ホﾝ 其方も家族を大事にするのだぞ。

瑞季 ・ ・ ・ うーん ・ ・ ・ はい。

ホﾝ いかがした？

瑞季 いや、ウチは両親が、てかパパが、父がだらしなき過ぎて大事にする気にならないと言うか ・ ・ ・ 。

ホﾝ 父？上田屋か。

瑞季 ああ、はい。本当に毎日だらだらだらしてて、

ホﾝ まあ子が親の事を理解するのは難しかろう。上田屋も其方が思っておるような人間とは違うかも知れぬぞ。

瑞季 そうですかね。

ホﾝ ワリヤンに会えたのも上田屋の手柄よ。余の好物の生春巻きを作らせたゆえ、ワリヤンがここにおるのに気付けたのだからのう。

瑞季 まあ偶然ですけど。

ホﾝ 偶然ではあるまい？上田屋が余に好物を問うた翌日に供されたのだぞ。

瑞季 え？。パパが聞いたんですか？

ホﾝ うむ。やはり余がこの廊下で大須城を愛でているおり、上田屋に声をかけられてのう。城の事など語りたるうち、そのような事も申したはず。

瑞季 そうなんですか ・ ・ ・ 。

ホﾝ うむ。余の好物を聞いて作らせたとあれば、上田屋は上田屋なりにやっておるのだろう。其方の一方的な見方で決めてはいかぬぞ。

瑞季 ・ ・ ・ すみません。

ホﾝ さて、そろそろ夕餉の時間かの。

瑞季 あ、そうですね。

ホン 今日夕餉も楽しみよ。  
瑞季 たぶん毎日生春巻きは出ないと思いますけど。  
ホン 何が出るかではない。弟の手料理が楽しみなのだ。

二人去る。

中庭。テムが畑山を連れて来る。

畑山 一体どうしたんですか？

テム はい、すみません。突然お呼び立てして。

畑山 大丈夫ですよ。でも、

テム でも？

畑山 急に呼び止められたからドキッとしちゃったな。

テムの心音が鳴る。

テム ……。

畑山 どうしたんですか？

テム はい。実はお話がありました。

畑山 お話？えー何だろう？私、テムさんに何かしちやいました？

テム いえ、

畑山 だとしたらごめんなさい！私ってドジだから。

テム そんな事無いです！由佳里さんはとても…仕事が出来る人です！

畑山 ……ありがとう。テムさんって…優しいんだね。

テムの心音が鳴る。

テム ……。

畑山 テムさん？

テム はい！…はい！…違います！

畑山 え？

テム そういう、そういう話ではないのです。…。由佳里さん！私は！…  
私は！



テムの心音が鳴る。

畑山 あれ？テムさん？テムさん？テムさーん！

急に心音が止み、テムの心の中に小春が現れる。

小春 テム。テム。

テム はっ！師匠ー！

小春 どうしたのです、テム。早く告れ。

テム はっ、はい。．．．しかし師匠、私は気の小さな人間です。告白する、勇気が足りない！

小春 テム。振られるのが怖いのか？ゴミめ。

テム 言い過ぎじゃないでしょうか？

小春 テム、振られた所で死ぬ訳じゃ無し。

テム それはそうですが．．．。

小春 むしろ告白しないと人は死ぬわよ。

テム そうなんですか！？

小春 そう。私の友達もそれで三人死んだわ。みんな．．．死んだわ。

テム ．．．何があったんですか！？

小春 だから勇気を出すのテム。ホンキと書いてポンギと読むのよ。

テム ．．．？

小春 六本木の話よ。

テム ああ．．．ん？

小春 さあ告白しなさいテム。

テム 師匠．．．。

史 テムさん！

史がやってくる。

テム 弟弟子．．．。

史 ．．．んー！

史、拳を突き上げる。

テム・・・何か言って欲しかった。

小春 さあテム。・・・こーくはく！こーくはく！

史 こーくはく！こーくはく！

小春と史の告白コールが続く。

畑山 テムさん？テムさん？

テム はっ！

畑山 どうしたんですか？

テム いえ、そのですね・・・

小春 ♪ねえどうしてー

小春がドリカムを歌い出す。

テム 私は、私はあなたが（ダンサーが登場）・・・ああ！心の師匠達の存在感が凄い！

畑山 どういう事？

テム ああ！（ダンサーを従える）・・・由佳里さん！

畑山 はい！？

テム 私はあなたが、あなたが好きだ！

畑山 え？

テム 結婚してください！

小春、ダンサー達停まる。畑山、顔を伏せる。

テム え？あれ？泣いてます？

畑山 違うの、これはその、嬉しくて・・・。

テム え？

畑山 テムさん、私の事をそんなに思ってくれたんだって判って・・・それ

がすごく、嬉しくて。

テム 由佳里さん……！（小春が歌い出そうとする）

畑山 でもごめんなさい。（小春、歌うのを止める）

テム え？

畑山 私、テムさんの事そういう風に見てなかったから……。

テム あ……あ、そう、ですか……。 （小春達撤収）

畑山 ごめんね……ねえテムさん。

テム あ、はい。なんですか？

畑山 私たち、友達になれないかな？

テム え？……それは……、

畑山 私なんかじゃ……ダメかな？

テム ……ダメじゃない！です！

畑山 ありがとう。じゃあ私たち友達だよ？

畑山、テムの手をとる。

テム ああ！はい！

畑山 じゃあそろそろお仕事に戻らなくちゃ！テムさん、またね！

テム あ、はい！

畑山、仕事に戻る。

テム あれ？これは……成？……失？……あれ？

暗転。

厨房に織田と江藤。

江藤 織田さん、帰るの？

織田 ここを片付けたらな。

江藤 あーいや……ピルピンに。

織田 ……俺がいないと困るだろ。それとも俺がいない方がいいのか？

江藤 いやそういう意味じゃないよ！ホンさんは連れて行くつもりだったか

らさ。

織田 俺は何処にも行く気はねえよ。  
江藤 そうか。

瑞季がやってくる。

瑞季 織田さん？あれ？江藤さん。

江藤 どうしました？

瑞季 いや、織田さんどうしてるかなって思って。

織田 どうもしてねえよ。

瑞季 ああ・・・そっか。

織田 心配すんな瑞季ちゃん。俺はここを出て行かないからよ。

瑞季 そう・・・でもどっちがいいんだろうね。

織田 瑞季ちゃんは俺に出て行って欲しいのかい。

瑞季 いや、そういう意味じゃないんだけどね！色んな話聞いたら判んなくなっちゃったから。何がいいのか。

織田 何が正しいかなんて事はその時は判らないもんだ。だからな、そんな時に出来る事は一つ。自分の信念に従う事だ。瑞季ちゃんも迷ったら自分の信念を、信じるんだぞ。

瑞季 判った。

江藤 ・・・・おお。織田さんの話のはずなのに、見事に瑞季ちゃんの話みたいになった。

陽介 織田くん！

陽介と小春がやって来る。

陽介 あ、織田君まだいた。良かったー。

織田 どうしたんです？

小春 これ。ピルピンに行っても私たちの事忘れないう様になって。余ってる法被を切って手ぬぐい作ったの。持ってって。

織田 ・・・・行きませんけど。・・・ピルピンには。

陽介 ええ！？

小春 旅館辞めないの？

織田 辞めません。

陽介 そうなの？・・・法被切っちゃった。

瑞季 それはどうでもいいよ。

小春 いいじゃない法被くらい！法被は切っちゃったけど、織田さんがこの旅館に残ってくれて私はハッピー、ごめんなさいあんまり上手い事言えなかった。

陽介、無言で小春を慰めつつ、織田を見る。

織田 いや、俺の所為じゃありませんよ！

ホン そこに居るのは誰か？

ホンがやってくる。

ホン うむ、其方めらか。

江藤 あ、ホン様。どうしました？

ホン うむ。テムを探しておったのだ。奴め、夕餉もあまり進まぬ様子だったうえ、しばし暇が欲しいと申すので許したが、なかなか戻らぬでな。

江藤 ああ、そうなんですか。でもここにはいらっしやいませんけ、

ホン おお、そこに居るのはワリヤンではないか。ピルピンに帰る備えは済んでおるのか？

織田 兄上・・・。

ホン このような所で粗末な生活に身をやつす其方を放っては置けぬ。明朝、迎えに来るゆえ、備えておくのだぞ。

織田 兄上！・・・余は帰りませぬ。兄上達だけでお帰りください。

ホン ワリヤン、大概に致せ。いつまでも聞き分けの無い。

織田 兄上こそ余の話をお聞き下さいませ。兄上のなさりよう、余は見ていらませぬ。

ホン そのように申してもな、

織田 とにかく、兄上とピルピンのだらしなき様が直るまで、余は帰りませぬ。

ホン ワリヤン・・・。

陽介 織田君。

江藤 あの・・・織田さん。一つ聞きたかったんだけどさ、何でこの旅館で働いているの？

瑞季 え？

江藤 いやだって、ピルピンのだらしなさに辟易として国を出たんだよね？でも・・・僕が言うのもあれだけど、この旅館そうとうだらしないよ？みんな適当だし。なのに何でここで四年間も働いているの？

織田 ・・・・。

江藤 ひよっとしてさ、ここ居心地がいいんじゃない？ピルピンみたいでさ。

織田 そんな事はありません。

江藤 ・・・・じゃあいいけど。

織田 ・・・・。

瑞季 ・・・・ねえ織田さん。私もさ、パパがだらしなくってすっごくイライラする時もあるんだけどさ、

陽介 え、そうなの？

瑞季 そう！・・・そういう時もあるけど・・・もしかしたら自分が知らないだけで、頑張ってるかもしれないよ？

小春 瑞季・・・。

瑞季 私が思ってるよりパパも頑張ってるかも知れないし、織田さんのお兄さんだってちゃんとしている部分あると思うし。家族って近すぎてどうしても偏った見方になっちゃうけど、ちゃんと向き合ったら違う面も見えると思うんだ。だからちゃんと話し合うとかしてみたりして・・・。

ホン 娘。

瑞季 うーん、なんて言うか、そんなに毛嫌いしないでさ、ちょっと帰ってみるのもいいかもよ？ウチは困っちゃうけど・・・まあそれは、なんとかするよ。

陽介 瑞季・・・何かあれだな。大人になったなあ。

瑞季 え？いや、そんな事無いよ。

小春 ううん、瑞季は立派に、若女将の風格よ。

瑞季 え？そ、そうかな？

陽介 よ！よ！若女将！

瑞季 あれ？バカにされてるのかな？

織田 瑞季ちゃん。．．．余は．．．恐れておるのです。ピルピンは小さな島国。資源も産業も無く、あるのは青い空、輝く太陽、光る海。ゆえに多くの者が不動産業を営んでおります。

瑞季 どういうゆえ？

ホン ピルピンはな、他国に比べて法人税率がとても低いのだ。ゆえに多くの企業がピルピンにオフィスを構えておる。

江藤 タックスヘイブんだ。

陽介 なにそれ？

江藤 税金を下げる事で資産家や企業を誘致してる場所です。脱税に悪用されたりもするんで、規制が議論されてるとか聞きましたけど。

陽介 へー。ママ知ってた？

小春 知ってる知ってる。あー、ピルピンもへブってるんだー。へー。

陽介 あ、これ知らないパターンだ。

織田 国の民めらは仮初めの不動産業で泡沫の夢の如き日々を送っておる。しかし夢は夢。いつかは醒めようもの。その時になって嘆いても遅いのです。

瑞季 織田さん。

織田 ピルピンに必要なのは労働に対する真摯な姿勢、そしてそれによって産まれる本物の価値。同じ島国である日本はそれを持っております。余は日本に技術を学びに來ただけではありませんせぬ。職人と呼ばれる者の魂までも持ち帰らんと、身も心も職人になりきっておったのです。

小春 それであんな喋り方になったのね。

織田 余は民めらに真摯に働く事の素晴らしさを伝えたく思うておる。しかし余はまだ未熟ゆえ、今帰りましたもうてもそれは出来ぬ。兄上の気持ちは嬉しく思います。余は．．．まだ帰れませぬ。

ホン ．．．ワリヤンよ。我が弟よ。．．．其方は日本に残るが良い。

瑞季 ホンさん．．．。

ホン 其方は其方の好きな様に致せ。

織田 兄上．．．。

ホン 其方を連れ帰ろうというのは、余の我が儘であった。其方にも其方の考えがあるのであるな。しかし、余にとって其方は血を分けた兄弟。兄が弟の心配をするのは必然。許せ。

織田 いえ、許すなどと……

ホン いつか……いつか其方がピルピンに帰ってきたその時には、其方が握った寿司を余に供するのだぞ。勿論……サビ抜きでな。

織田 兄上……へい！かしこまりました！

ホン うむ。……何だか腹が減ってしまったのう。そう思わぬか？

瑞季 あ、何かご用意しますか？

ホン いや、余の部屋にはまだ二人分料理が残っておる。そこな料理人よ。余が夕餉を恵んでやるゆえ、余の部屋へ参れ。共に膳を囲もう。

織田 ……ありがとうございます。

瑞季 じゃあせめて温め直しましょう？織田さん！

織田 へい！瑞季ちゃん！

瑞季、織田、ホンがホンの部屋へ向かう。

陽介 ……ママ。

小春 何？

陽介 この旅館の為に瑞季が頑張ってる様にさ、僕にも出来ると思うかい？

小春 ……うーん……。

陽介 やっぱ無理かな？

小春 ー、出来、んー……、

陽介 出来ん？出来ぬ？

小春 パパ。ママは難しい事は良く判らないけど、こういう時は大体こういうの。案ずるより、産むが易し。

陽介 案ずるより、産むが易し？

小春 Don, t think, bear.

陽介 考えるな、産め？

小春 そう。きっと考えてたってダメなのよ。考えてるよりもいつそ産んじやってみた方が、何事も上手くいくものなのよ。

陽介 そうかな。

小春 そうよ。……瑞季もそつやって産まれたのよ。

陽介 そうかあ。

江藤 ……良かった。瑞季ちゃんだけには絶対聞かせられない話が聞かれな



くて。

暗転。

上田旅館のフロント。

瑞季が誰かを探すようにキョロキョロと入ってくる。

瑞季  
．．．．．あれー？

畑山が掃除用具を持ちながら通りかかる。

畑山 あ、瑞季ちゃんお帰りなさい。

瑞季 たいま。由佳里さん、江藤さんは？

畑山 ー、さつき史君と一緒にフロントに居ただけどなあ。あ、ほら。

江藤と史がやってくる。

江藤 だから何でもかんでも燃えるゴミに置きちゃダメだから。

史 燃えるんですけどね。新聞紙。

江藤 そうなんだけどね。

瑞季 江藤さん。

江藤 あ、はい。なんですか？

瑞季 これ、見ました？

江藤 また旅館のロコミサイトですか？

瑞季 ウチの旅館の書き込みが増えてて。

江藤 どれです？

織田が顔を出す。

織田 江藤さん、社長知らねえか。

瑞季 パ。パがどうしました？

織田 ああ瑞季ちゃん．．．．．（戻る）

瑞季 いや、待ってくださいよ！織田さん。何ですか？

織田 ……瑞季ちゃん……知ったら絶対怒るぜ？

陽介と小春がやってくる。

陽介 おお瑞季。

小春 あ、瑞季おかえり！

瑞季 ママただいま。ねえパパ、

小春 ねえ瑞季！聞いて聞いて！

瑞季 何？

陽介 いや、大した事じゃないんだけどね。

瑞季 だから何が？

小春 実は、パパが誰にも言われずに玄関前を掃除してきたの！きゃー！偉ー  
い！パパ偉ーい！

陽介 いや、これくらいは当たり前の事だからね。大した事じゃない。表を掃  
除してきたのは！別に大した事じゃないよ！はっはっは！

瑞季 ……どうしよう本当に大した事じゃない。

江藤 でもほら、やっただけ成長したって考え方もありますし。

小春 あ、織田さん。お赤飯用の餅米買ってきた？

瑞季 赤飯？

小春 パパの、掃除記念でしょ？

瑞季 それで赤飯？

織田 ほら怒った。

小春 だって瑞季、今までこんな事あった？

瑞季 無きやダメだよ。

小春 瑞季。ダメで元々。

瑞季 意味が違う。

陽介 さあてこの調子で館内も掃除しちゃおうかな。

小春 ええ！間髪入れずに？間髪を入れずに玄関前から館内まで清掃を施す  
の？いつからそんな強靱な肉体に？

江藤 割と普通ですよ。

陽介 ママ、早く来ないと置いてっっちゃうぞ。

小春 はっはー、待てよお！

陽介と小春が奥へと消え去る。

瑞季 やっぱりこの旅館はダメかも知れない……。

江藤 まあまあ……僕らも頑張りますから。ね？

瑞季 あ、そうだ。口コミサイト。

江藤 この流れでか。

史 ダメですか？

江藤 ダメじゃなかった事が無いよ。

瑞季 ちょっとこれ見て。

畑山 えーどれどれ？（瑞季の肩に手を置いて覗き込む）

瑞季 由佳里さん重い。

畑山 あ、ごめんね？

瑞季 うん。……ほらこれ。

江藤 えーっと、「ネットで検索して利用しました。接客、料理、景観、どれも最高の旅館でした。外国人にも優しいので、また利用したいと思います。」これ、ピルピンの？

瑞季 他にいないでしょ。お礼言わなきや。織田さん、連絡先知らない？

織田 まだ飛行機に乗ってる時間だ。……あとで俺から礼を言っておくよ。

瑞季 ありがとう！

史 ここ、コメント返せますよ？

瑞季 あ、じゃあ取りあえずここに書こう！えーっと……、

みんなでコメントを考えながら徐々に暗転。

テム 失礼します！

明転。ホンとテムが入ってくる。

江藤 ホン様！

ホン 余が、ホンだ。

テム 本日最終の飛行機に乗り遅れてしまいました！

瑞季 乗り遅れちゃったの？

テム つきましては本日この宿に一泊したいのですが部屋は空いていますでしょうか？

江藤 空いています。どうぞ！いらっしやいませ！

テム ではホン様。

ホン うむ。そこな料理人。本日の料理も、楽しみにしておるぞ。

織田 ・ ・ ・ へい。腕によりをかけて、作らせて頂きます。

ホン うむ。

瑞季 あ、ではどうぞこちらへ！

それぞれがそれぞれの仕事をしつつ、

幕。